

NPO 市民科学研究室 低線量被曝研究会御中

追加質問いただきました「100 mSv 以下のがんリスクに関する放射線医学研究所の見解について」回答させていただきます。

放射線医学研究所では、100mSv 以下のがんリスクを明らかにすべく日々研究を行っており、主には細胞・動物実験からの結果ですが、低線量・低線量率の放射線影響に関する知見を創出しております。こうした弊所の論文は、原子放射線の影響に関する国連科学委員会報告書（UNSCEAR 2020/2021 Report）の科学的付属書 C 「Biological mechanisms relevant for the inference of cancer risks from low-dose and low-dose-rate radiation」にも多数引用され、低線量・低線量率の放射線影響に関する国際的コンセンサスの形成に貢献しております。

今回、放射線医学研究所の見解を、とのことですが、原則、こうした個々の研究結果に関する科学的議論はアカデミアコミュニティの中で行うこととしております。一般の方々への情報発信に関する方針としては、放医研の研究そのものにご興味を持ってくださっている方には、研究成果発表会や公開講座を通じて、個々の研究結果もご説明させていただいておりますが、放射線の影響に関心や懸念をお持ちの方々への情報発信は、放医研の個々の研究については原則言及せず、「科学的に確かであると国際的なコンセンサスと認められている事実」についてのみお伝えすることとしています。

早見図の作成の意図については、HP でもご説明している通り、東京電力福島第一原子力発電所の事故直後に、一般の方にはなじみのない放射線の単位等が繰り返し報道されたことから、放射線被ばくについて考える際に参考としてお使いいただけるように、身近に使われる医療放射線による被ばくや、身の回りの自然放射線による被ばく線量に応じた人体への影響、管理上の基準となる値等を一覧に示

したものです。そして国際的コンセンサスとして、「100mSv 以上の放射線被ばくについては、がん死亡のリスクが線量とともに徐々に増えることが明らかになっている」と記載いたしました。

また ICRP2007 年勧告において「がんの場合、約 100mSv 以下の線量において不確実性が存在するにしても、疫学研究及び実験的研究が放射線リスクの証拠を提供している」と記載された点や、米国統計学会が「100mSv で 2 分割してリスクが明らかであるとかないとかと結論するのは「誤った思い込みと貧弱な意思決定」を誘導する可能性があるという指摘した点に関して、放医研として特段異論はありません。

さらに早見図の修正についてもご意見を頂きましたが、前回もお答えいたしました通り、今後とも線量やリスクに関する最新の情報を盛り込むように、必要に応じ不定期に改訂するように努めます。

国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構
量子生命・医学部門 放射線医学研究所
所長 山下 俊一